

ヨーロッパの基層文化と近代

研究代表者 松 本 彰

1. プロジェクト内容概略

本プロジェクトはこれまで新潟大学大学院現代社会文化研究科において行われてきた研究プロジェクト「欧米の言語・社会・文化の総合的研究」の成果を受け継ぎ、新たなテーマ設定のもとに研究を発展させるとして出発した。

とくに、「ヨーロッパの基層文化と近代」をテーマとしたのは、最近、「基層文化」をめぐる研究が活発化しており、それらの議論から学びつつ、ヨーロッパ像を再検討するための学際的プロジェクトとして、歴史学、文学、言語、思想、宗教などの諸研究の総合をめざすこと、学内外の研究会、プロジェクトと連携しつつ、多様な研究の可能性を追求することが重要である、と思われたからである。

2. 参加メンバー

松本 彰，高橋秀樹，細田あや子，高木 裕，桑原 聡，逸見龍生，井山弘幸，山内志郎，原 聖（研究協力者 女子美術大学教授）

3. プロジェクトの進捗状況

（平成16年度の活動，プロジェクトに関連する口頭発表・論文など）

プロジェクトとしての活動は、研究会を一回開催し、雑誌、『欧米の言語・社会・文化』第11号を刊行した。

松本 彰：ヨーロッパの基層文化と近代

大石 強：受動名詞形について

斎藤陽一：日本人論としての野田秀樹『贖作・罪と罰』

逸見龍生：『百科全書』を読む－本文研究の概観と展望

研究会では、代表者 松本が、研究の基本テーマについて、これまでの研究史にそって説明し、討議した。以下は、『欧米の言語・社会・文化』第11号のためにまとめたものである。

川田順造編『ヨーロッパの基層文化』（岩波書店、1995年）が出てからほぼ10年たった。同書は、国立民族学博物館で1991年から3年間かけて行われた共同研究をもとにまとめもので、川田氏はじめ、文化人類学者が中心になり、歴史学、文学、美術などの専門家も含めて、日本ではじめて総合的に「ヨーロッパの基層文化」を問題にしたものとして、画期的な成果だった。

川田順造「序、ヨーロッパ、近代、基層文化」では、

- 1) 「ヨーロッパ」が「交渉の場」として、「地域としてのヨーロッパ」として、考えられており、「国民国家の総和」ではなく「国民国家を超えるもの」として問題にされていること、
- 2) 「近代」が単なる「歴史上の時代」ではなく、人間の営みの「ある複合された状態」、つまり「近代化」や「近代的」が表現するような、合理性の尊重、個人の自由と権利の平等などの価値観とともに、生活上のある種の便利さや快適さなどを意味するとされ、「近代」がもたらすはずの恩恵が求められ続けている一方で、「近代」の生み出した害悪が糾弾されている」という二面性が指摘されていること、
- 3) 「基層文化」は、「歴史的に先行し、新しい層に覆われながらも、いろいろな形で「近代」に意味をもちつづけていると思われる「古層」、「階層（ごとの文化）を越えるもの」とされ、それらは「近代」の形成にとって、必ずしも正の方向で作用したとは限らない、とされていることが注目される。

そのような理解を前提に、いま「ヨーロッパの基層文化」を日本で問題にすることの意義は、以下のようにまとめられている。

「近代」を必要としながら、「近代化」されていない社会をも含む人類全体の行く手に、「近代」の生んだ害悪が暗く立ちふさがっている現在、近視眼的な対症療法としてではなく、人類のさまざまな部分がそれぞれの自

然・歴史条件の中で、それこそ「自前で」開発してきた知恵の総目録の、長く広い視野の中に、その一つとしてヨーロッパ近代の根底を位置づける努力をすること、その試みを、非西洋社会の中で西洋近代との関係では、やや特異な立場にある日本人の研究者の手で行うことには、東洋対西洋の対比などを越えた意義があるのではなかろうか」(48,49頁)。

昨年(2004年)、川田氏の著作として、『アフリカの声－「歴史」への問い直し』青土社、『人類の地平から－生きること死ぬこと』ウェッジ、『コトバ・言葉・ことば 文字と日本語を考える』青土社、『人類学的認識論のために』岩波書店の四冊が出版され、川田氏のきわめて広い研究の全体像を知ることができるようになった。なによりも興味深いのは、川田氏の研究では、生まれ育った日本、留学し調査を行ったフランス、フィールドワークの場であるアフリカ、三つの地域の「文化」の比較が重層的に行われていることである。「東西」比較に「南」を加えて、三点を見据えるという「三角測量」という比較の視座は刺激的で、今後の「ヨーロッパの基層文化と近代」研究を具体化させるための「欧米の言語、社会、文化」の総合的研究のために多くの示唆を与える。

このほかにも、この20年ほどのあいだ、日本では「基層文化」について、さまざまな議論がされている。たとえば、「民族の世界史」シリーズ(山川出版社)の8巻は井上幸治編『ヨーロッパ文明の原型』(1985年)、9巻は二宮宏之編『深層のヨーロッパ』(1990年)と題されている。後者のまえがきで、二宮氏は、「基層文化」という用語を用いている。また、上山安敏「「古層」・「基層」史観をめぐって」(河上倫逸編『ドイツ近代の意識と社会－ゲルマニスティックのアンビヴァレンツ』ミネルヴァ書房、1987年)、丸山真男「原型・古層・執拗低音－日本思想史方法論についての私の歩み」(初出、丸山真男他『日本文化の隠れた形』(初出、岩波書店、1984年、その後『丸山真男著作集』第12巻(岩波書店、1996年)所収)などでの用語・概念、方法の検討も参考にすべきだろう。注意すべきは、それらは「民族の基層文化」を問題するところからはじまった議論であって、先に問題に

した川田順造氏の議論とは若干、位相の違いがあることである。いま、国民国家が正面から問題にされているときに、「民族の基層文化」と「ヨーロッパの基層文化」をどのように問題にすべきなのだろうか。ヨーロッパ統合の進展とともに、新しい問い直しがヨーロッパでも盛んに行われており、それを背景に、日本でも「基層文化」論とともに、「国民国家」論、「ヨーロッパ」論が盛んになりつつある。たとえば谷川 稔編『歴史としてのヨーロッパ・アイデンティティ』（山川出版社、2003年）に収められた多彩な研究は最近の歴史学の研究動向の一端を示している。

「ヨーロッパの基層文化と近代」プロジェクトの出発にあたって、私はその趣旨を以下のように説明した。

「ヨーロッパの文化は先史時代のケルト、ゲルマン文化、古典古代のギリシア、ローマ文化、そして古代から中世にかけてのキリスト教の文化を基礎にして発展し、ヨーロッパ近代の基層となった。近代についての根源的問い直しがなされる中、またヨーロッパ統合がすすむ中、ヨーロッパの特質、特殊性についてあらたに議論がまきおこっている。それらの議論から学びつつ、ヨーロッパの全体像を再検討するための学際的研究プロジェクトとして、語学、文学、歴史学などの諸研究の総合を目指したい。」

先に述べてきたように、「ヨーロッパの基層文化と近代」は、新しい問題意識に支えられた「ヨーロッパ」再考の試みである。今後、学外のさまざまな研究プロジェクトとも連携しつつ、このプロジェクトを実りあるものにしていきたい。